

- 熊野正也 1978 「佐倉市・臼井南遺跡出土の後期弥生式土器の意味するもの」『MUSEUMちば』9 千葉県博物館協会
- 林勝則 1986 『平戸道地遺跡』八千代市教育委員会
- 深沢克友 1978 「房総地方弥生後期文化の一様相—印旛・手賀沼系式土器文化の発生と展開について—」『千葉県文化財センター研究紀要』3
- 古内茂 1974 「房総における北関東系土器の出現と展開」『ふさ』5・6合併号
- 八千代市教育委員会 1995 『八千代市埋蔵文化財調査年報』平成6年度
- 八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報』平成6年度版

第2節 弥生土器の縄文

弥生土器に施文された縄文については、文様と施文原体の観察結果を属性表（第9表）に記載したが、ここで原体の種類等についてまとめておきたい。弥生土器については、縄文原体の記載がごく簡単に済まるのが普通であるが、当遺跡のように縄文の種類が多様な土器群については、原体の種類を記載すべきであろう。縄文は多くの土器属性の一つにすぎないが、当地域の土器研究にあっては有効な指標となるはずである。

1 観察と分類の方法

原体の観察と分類は、実測作業を終了した後に、『江原台』（田村他1979）を参考にして行った¹⁾。対象は縄文施文資料302点のうち、同一個体の重複や原体の不明瞭なものを除いた272点である。その後、最近の研究成果の存在を知り、原体の記載は基本的に峰村篤の方法（峰村1999）に合わせることにした。当遺跡における附加条縄文はすべて附加条1種（山内清男1979）であるため、単に附加条とする。2条を附加するものについては、軸縄の溝に沿って附加縄を1条ずつ巻いていく「交互附加」を「+R・R」のように、2条を同時に巻いていく「同時附加」を「+2R」のように表現する。ただし、「前前段多条」・「直前段多条」という山内・峰村の表現は用いず、田村の「0段」・「1段」を採用した。この場合、相対的な表現よりも、絶対的な表現のほうがわかりやすく、誤解が生じにくくないと判断したものである。また、当遺跡の附加条縄文は大半を2種類の原体が占めるものの、それ以外に1～3例しか見られない多くの種類が見られたため、大半を占める2種類をA類・B類とし、その他をC類としてまとめた。なお、後に詳述するように、単節縄文の1段多条の原体と、附加条縄文の原体はほぼ同様に作られたものである。附加縄が軸縄の中にしっかりと入り込んだものは単節縄文・1段多条（単節・B類とする）となり、附加縄と軸縄の差が相対的に大きいものは附加条縄文となる。実際には中間的なものが多く、峰村はいくつか段階を設定しているが、今回は厳密な観察と区分をしていない²⁾。以上の方針により以下のように分類を行った。

単節縄文

- | | |
|--------|----------------|
| 単節・A類 | (1段2条) |
| 単節・A'類 | (1段2条、原体が太いもの) |
| 単節・B類 | (0段多条または1段多条) |

附加条縄文 (1種)

- | | |
|---------|-----------------|
| 附加条・A類 | (2条交互附加) |
| 附加条・B1類 | (1条附加) |
| 附加条・B2類 | (2条同時附加) |
| 附加条・C類 | (その他の附加条。5種類あり) |

無節縄文

撚糸文

布压痕

図版90～92に各分類の代表的なものについて実体顕微鏡で撮影した拡大写真を掲載した。一部はチョークをつけたままであるが、ご理解をいただきたい。2枚を左右に並べたものはステレオ写真である。平行法で実体視すると条の深さなどの変化を読みとることができる。○番号は、相同の条を示している。条を識別して何条で1サイクルになっているかが、主要な観察点となる。なお、交差法で見ると凹凸が逆転してしまうが、原体の縄の形状は鮮明になる。

2 文様と施文原体の種類

(1) 単節縄文

単節・A類 1段の縄を2本撚り合わせた、ごく細い2段の縄を原体とする（単節・1段2条）。ほとんどはLRとRLを羽状施文している。LRとRLの原体は同じ太さである。原体が細いために一度に幅広く施文するのは困難である。施文幅は指1本分程度であり、しかも浅い。回転・接触不良のものも多い。一般に「南関東系」とされる、折返し口縁や赤彩によって飾られた壺・高杯・鉢・椀にみられた。

図版90-1 (003-26)・単節・1段2条・羽状 RL, LRとも原体を回転させた横方向に、同じ節・条が2条ごとに現れる（以下ではこれを「2条サイクル」のように表記する）。写真上に示した①・②がそれぞれ相同的の条である。施文は浅い。

図版90-2 (060-9)・単節・1段2条・羽状 RL, LRとも2条サイクルである。施文単位のわかりやすい、比較的しっかり施文された部分を撮影したが一部に重疊施文がみられる。他の部分では、接触・回転不良により何度も繰り返して施文していることが多い。

単節・A'類 1段の縄を2本撚り合わせたA類のなかで、やや太い原体を使うものである。装飾性をもつ壺・鉢にみられるが、胎土や色調などは在地系の土器に似たものを含む。羽状施文の場合にはLRとRLで原体の太さが違っているものや、一方の原体の撚りが乱れているものが多い。どちらか一方に撚るのが不得手であった可能性がある。

単節・B類 1段の縄を3本から4本撚り合わせた、2段の縄を原体とする（単節・1段3条または4条）。A類に比べて原体はやや太い。羽状施文は1例のみであった。なお、1段で3条ないし4条を撚り合わせる方法は、1段2条の原体に1本ないし2本を附加する附加条縄文とあまり変わらない。実際に、原体閉端圧痕が付いた資料では、1段の縄1本を折り曲げて閉じたものに、もう1本を附加していることがわかる。この場合、単節縄文と附加条縄文の差は、軸縄と附加縄の太さの違いがあるか、及び附加縄がどれだけ撚り合わされているかによる。分類は、施文された結果、附加縄の条が他とあまり変わりないものを単節縄文、附加縄のほうが深いもの、節が尖るものなど差が認められるものを附加条縄文としたが、その違いは漸移的である。

在地系とみられる壺や壺に施文された単節縄文は、ほとんどがこの原体を使っている。例外は単節・0段多条（おそらく3条）の4例のみである。ただし、0段多条は、単節・B類や附加条縄文に普通であるのに対して、単節・A類には全くみられない。この4例も単節・B類に含めることにした。その結果、在地系とみられる土器には、0段ないし1段2条の単節縄文を施文した例が皆無となった。

図版90-3 (004-32)：単節・1段3条・RL 3条サイクルである。条の深さ、節の形状に差がみら

れず、施文効果は単節そのものであるが、1段Lを3条燃り合わせている。写真の①～③は相同的の条であり、チョークで白く印をしているのが特徴的な相同的の節である。

図版90-4 (052-6) : 単節・1段3条・RL 3条サイクルである。②とした条がやや深く付く傾向があるが差は顕著でない。

図版90-5 (035-1) : 単節・1段4条・RL 条ごとの差がほとんどなく施文効果は単節縄文そのものであるが、4条サイクルである。相同的の節が4条ごとに現れている。

(2) 附加条縄文

附加条・A類 (LR+R・R, RL+L・L) 単節縄文の原体（2段の縄）に1段の縄を2本交互に附加したものである。軸縄の溝に沿って螺旋状に附加縄を巻いていくと1条おきとなり、あいた部分にもう1本を巻く。附加条縄文の大半がこのタイプである。軸縄LRにはRを、軸縄RLにはLを附加する。附加縄の太さが軸縄の1段に近く、さらによく燃合わさせて軸縄のなかに入り込むと単節・1条4段になる。縄文施文全体の45.5%，附加条縄文の78.6%を占め、もっとも一般的に使われたといえる。LR+R・RとRL+L・Lを羽状施文するものもみられる。

図版90-6 (067-6) : 附加条・LR+R・R 4条サイクルである。1条おきに深い浅いが繰り返す典型的なもので、浅く接触不良の②と④が軸条、深い①と③が附加条である。

図版90-7 (055-7) : 附加条・LR+R・R 4条サイクルである。やや浅い②と、接触不良の④が軸条である。しかし、軸条と附加条の差は小さいので、施文効果としては単節縄文（単節・1段4条）に近い。

図版90-8 (056-34) : 附加条・LR+R・R 4条サイクルである。浅い②と④が軸条、深い①と③が附加条である。①が他の条と平行でなく不規則なのは、附加縄が軸縄の溝に沿って規則的に巻かれていなかったか、途中でずれたためであろう。

附加条・B1類 (LR+R, RL+L) 単節縄文の原体（2段の縄）に1段の縄を1本附加したものである。軸縄LRにはRを、軸縄RLにはLを附加する。

図版91-9 (059-5) : 附加条・RL+L 3条サイクルである。①と③は繋がっており、1段の縄を折り返している原体閉端圧痕である。軸条は末端部では深く施文され、他の部分では浅いか接触不良となることが多い。②は附加条で、末端部以外では若干深い。上端のみもう1条見える部分は②と繋がっていて、附加されなかった部分であろうか。しかし、軸条と附加条の差は小さいので、施文効果としては単節縄文（単節・1段3条）に近い。

附加条・B2類 単節縄文の原体（2段の縄）に1段の縄を2本合わせて附加したものである。軸縄LRにはRを、軸縄RLにはLを附加する。表記はLR+2R, RL+2Lとする。

図版91-10 (059-2) : 附加条・RL+2L 深・深・浅・浅の4条サイクルである。②・③が軸条、①・④が附加条である。附加条のほうがやや深く、節が尖る。

図版91-11 (056-36) : 附加条・LR+2R これも深・深・浅・浅の4条サイクルであろう。やや不規則であるが、②・③が軸条、①・④が附加条であろう。不規則なのは、A類に比べて原体が乱れやすいことの現れであろうか。

附加条・C類 A類、B類以外の様々な原体をまとめた。いずれも例はごく少ない。

図版91-12 (065-13) : 附加条・R+I・I 1段Rの軸縄に0段1を2本交互に附加する。深・浅・

深・浅の4条サイクルである。①と③が附加条で、軸・附加条とも施文すると無節である。

図版91-13 (061-22) : R+I·I 1段Rの軸縄に0段1を2本交互に附加する。写真では見えにくいか、末端で深く、次第に消える①と③が軸条、途中から出ている②と④が附加条である。軸条・附加条とも無節であり、条のなかには纖維痕がみられる。底部付近であるため原体閉端圧痕は下側に付いている。

図版91-14 (061-17) : 附加条・LR+2L 単節縄文の原体(2段の縄)に1段の縄を2本合わせて附加したものであるが、附加縄の撚りが通常とは逆である。①・②の軸条と③・④の附加条で節の傾きが逆になっている。

図版91-15 (083-18) : 附加条・LR+R・ずらし附加 単節縄文の原体(2段の縄)に1段の縄を1本附加するが、附加するピッチが通常と異なる。通常は軸縄の溝に沿って巻くところを、1回巻くごとに1条(間隔が広くなるほうに)ずらしている。原体を復原したところ同様の施文効果を得ることができた。

083-20は、集計表の「多段構成」に含めている。ずらし附加の例はほかに「附加特殊」に含めた055-11, 085-9、「多段構成」に含めた088-18がある。

図版91-16 (065-2) : 附加条・LR・1段3条+R 単節・B類・1段3条の軸縄に1段の縄Rを1本附加している。①の附加条と②~④の軸条3条で4条サイクルとなっている。

図版92-17 (055-10) : 附加条・RL+LR·LR 単節・RL(2段の縄)に2段の縄を2本交互に附加したものである。附加縄に2段の縄を使うのはこの資料1点のみである。②と④は繋がっており、軸縄の閉端圧痕が深く付いたものである。①と③の附加条は施文すると複節となり深く付いている。

図版92-18 (042-2) : 附加条・LRL+2R·2R 複節(3段の縄)・LRLの軸縄に、1段Rを2本束ねたものを2本交互に附加したものである。軸縄に3段の縄を使うのも、合わせて4本を附加するのもこの資料のみである。

図版92-19 (065-7) : 附加条・L+L 無節(1段の縄)・Lの軸に、同段・同撚のLを1本附加したものと思われる。軸条①と③は閉じた端を形成している。附加条は撚り戻しになっている。原体を復原したところ、同じ太さのLを2本結合し³⁾、かなり撚りを緩くしながら一方を附加縄として巻きつけるとほぼ同様に施文できることがわかった。

図版92-20 (083-18) : 附加条・不明 原体は不明であるが、附加条縄文と思われる。繰り返しは認められるが、複雑である。

(3) 無節

図版92-21 (003-28) : 無節・R 2条サイクルである。条の幅は装飾壺等に普通な単節・細縄文と同じくらいである。

図版92-22 (052-10) : 無節・L 2条サイクルである。

(4) 撥糸文

図版92-23 (045-3) : 撥糸文・L 軸への巻きつけが密で施文効果が単節に近いものである。仮に単節として観察すると、想定される回転方向に繰り返しが認められないので識別できる。縦に施文する。

図版92-24 (004-30) : 撥糸文・R 横に施文し、条は横方向である。条の方向が斜め以外の資料は、おそらく1点のみである。

図版92-25 (003-31) : 網状撗糸文・無節 0段(撗り方向不明)2条を縫に絡めた無節の網状撗糸文である。条の幅は0.4mmと、縄というより糸というのが相応しい。

図版92-26 (060-14) : 網状撚糸文・単節 1段R2条を縦に絡めた単節の網状撚糸文である。

(5) 布圧痕

布圧痕の可能性がある資料1点を掲載した。なお、このほかに折返し口縁の下端などに付けられた原体圧痕のなかにもいくつかみられた。

図版92-27 (086-5) 単節縄文に似るが、相同的の条・節の繰り返しが全く認められず、単位の重複しているところを除くと、稜が縦にも横にも連続していてはずれた箇所がみられないため、布目圧痕ではないかと考えた。経糸と緯糸が直交する様子がみられることから、布目圧痕とみて誤りない⁴⁾。

3 縄文施文技法の特徴

縄文施文資料302点（片）のうち、同一個体の重複や原体の不明瞭なものを除いた272点について集計したのが、第4表である。単節縄文と附加条縄文の単純な比率は、単節32.4%（88点）に対して附加条57.0%（155点）であるが、単節縄文のうち、単節・B類とした附加条縄文と同様の原体で施文したものに附加条に含めると、単節系25.7%（70点）：附加条系63.6%（173点）となる。撚りの方向は、羽状施文が一般的な単節・A類は当然であるが、単節・B類や附加条縄文を加えても、0段→1段R→2段LR側167点に対して0段R→1段L→2段RL側140点と、顕著な差がない。ただし、単節・A類ではLRとRLは同じ太さの原体で同じように施文されているのに対して、単節・不明や附加条を羽状施文したものにはLRとRLのどちらかの撚りが不完全であるものや、太さの違う原体を使うものがみられた。おそらく在地系土器の作り手には羽状縄文が一般的でなかったことが原因であろう。個人的なレベルでは1巻きとr巻きに得手不得手があった可能性がある。

附加条縄文には多くの種類がみられたが、資料数でみると附加条・A類が8割近く（78.6%）を占めており、標準的な縄文原体といえそうである。原体を復元して施文実験を行ってみると、附加条を加えることによって、あたかも雪道でタイヤチェーンを巻いたように滑らない効果がみられた。また、同じ節の大きさの縄文で比べた場合、附加条原体は条が多い分太いため、そのこと自身が施文しやすい効果をもつ。土器の曲面に、一度にきわめて幅広く施文する技法は、柔らかい軸で滑りにくい仕組みをもった附加条原体でなければ存在し得なかつたであろう。単節・A類の指1本分のごく狭い幅で施文する技法とは対照的なあり方である。これは、当然どちらが優れているかではなく、一度に幅広くくつきりと施文するか、何度も施文を繰り返してでも細かい縄文を施文するか、といった指向の違いとみるべきであろう。

単節縄文は、いわゆる「南関東系」の土器と在地系の土器の両方に認められるが、A類とした前者に特徴的な縄文は、在地系の土器のなかには全く見出すことができなかつた。B類とした1段ないし0段多条の縄文は、文様としての効果はほとんど変わらなくとも、撚り合わせる縄の数が異なつてゐるのである。その効果について峰村は「主に条の変化を指向していることが窺える」（峰村1999）としているが、施文された結果としては差が少ないのであるから、むしろ附加条原体と同様の、施文するときの効率やくつきり施文できるかどうか、あるいは多条を撚り合わせる伝統などを想定すべきではないだろうか。

当遺跡の土器群に限つても、縄文施文の技術や縄文原体の製作には排他的な2つの伝統が存在し、長く継続したらしい。弥生土器の縄文については、報告書等にデータが充分提示されない傾向にあるが、以上に示した排他的な要素は系統の識別や型式の認定において有効な指標となるのではないか。その2つの系統は、単節縄文のなかにも存在した。1段ないし0段多条の単節縄文を識別する必要があることを強調しておきたい。

第3表 弥生土器の縄文組成

分類1	分類2	原体	合計	
単節	A類 (1段2条)	単節・LR 単節・RL 単節・羽状	7 7 47	1・R・LR系 合計 168個
	A類 合計		61	22.4%
	A'類 (1段2条)	単節・LR 単節・RL 単節・羽状	2 1 6	r・L・RL系 合計 136個 (羽状は両方にカウント)
	A'類 合計		9	3.3%
	B類 (1段or0段多条)	単節・0段多条・LR 単節・0段多条・RL 単節・1段3条・LR 単節・1段3条・RL 単節・1段3条・羽状 単節・1段2&3条・LR 単節・1段4条・RL	2 2 6 5 1 1 1	
	B類 合計		18	6.6%
	単節 合計		88	単節計 32.3% 単節B類除くと 25.7%
				附加条内訳
	A類 (2条交互附加)	附加条・LR+R・R 附加条・RL+L・L 附加条・羽状	78 32 11	A類 81.2% B1類 8.1% B2類 2.7% C類 8.1% 計 100.0%
	A類 合計		121	44.5%
附加条	B1類 (1条附加)	附加条・LR+R 附加条・RL+L 附加条・羽状	4 7 1	
	B1類 合計		12	4.4%
	B2類 (2条同時附加)	附加条・LR+2R 附加条・RL+2L	1 3	
	B2類 合計		4	1.5%
	C類 (その他の附加条)	附加条・1段R+0段1・1 附加条・LR+2L 附加条・LR+R・R・附加特殊 附加条・RL+LR・LR 附加条・L・L 附加条・羽状・附加特殊 附加条・多段構成	3 1 2 1 1 2 2	
	C類 合計		12	4.4%
	その他 合計 (不明など)		6	2.2%
	附加条 合計		155	単節B類含むと 附加条計 57.0% 63.6%
	無節	無節・L 無節・R 無節・羽状	3 2 1	
	無節 合計		6	無節計 2.2%
撚糸文		撚糸文? 撚糸文・L 撚糸文・R 撚糸文・羽状 撚糸文・網目状	1 7 5 1 8	
	撚糸文 合計		22	撚糸文計 8.1%
	布压痕		1	布压痕計 0.4%
	総計		272	合計 100.0%

〈引用文献〉

- 田村言行 1979 「弥生時代」「弥生式土器について」『江原台』佐倉市教育委員会
山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
峰村篤 1999 「稔台I群土器について」『稔台遺跡 第2地点発掘調査報告書』松戸市遺跡調査会

註

- 1 実測図における縄文原体の表現を修正する余裕はなかった。属性表が優先するものとしたい。
- 2 単節・B類の存在は、遺物の観察が一通り終了してから気がついた。附加条縄文に分類した資料のなかから、附加条が軸縄とあまり変わらないものを見直す必要があるが、完全には実施できなかった。したがって、組成では附加条縄文が多めになっている可能性が高い。
- 3 田村1979の付図に軸縄と附加縄の結合の仕方が示されている。
- 4 佐倉市教育委員会 田村言行氏にご意見をうかがった。

第3節 土器以外の出土遺物

金属製品（第16表、図版88）

金属製品は判別可能な製品をすべてX線写真撮影を行ったうえ図化した。銅鏃1点（001-27）のほかはすべて鉄製品である。その他の鉄片も出土しているが出土量は少ない。

弥生時代後期まで遡る出土状況の確実な例はわずか2点に過ぎない。刀子の茎（008-8），および広根無茎の鉄鏃（088-27）である。弥生時代末以降はやや増加し、銅鏃（001-27）以外に、刀子や工具類が7点程度（001-28, 29・004-39, 40・013-9・041-2, 3）が伴う。古墳時代前期の事例では2点（002-8・084-19）が伴う。鉄製直刃鎌（084-19）はほぼ完形の良好な資料である。古墳時代中期以降では、鉄製の長頸鎌（018-56），曲刃鎌（020-43），刀子ハバキ（038-30）など比較的大型品が残される。石棺出土の刀子（026-2）はハバキが装着されたまま柄がはずされ、切先と茎が裸で折り曲げられた状態で副葬されていた。

このように、弥生時代から古墳時代にかけて鉄器出土率が微増するが、本格的な鉄器増加が始まる古墳時代中期までに集落が縮小するので、出土総量は少数にとどまったとみられる。

石製模造品（第13表、図版89）

古墳時代中期の竪穴住居跡・土器溜まりから滑石製模造品が出土した。鏡形である双孔円板15点（003-37・014-19・014-18・017-13, 14・018-44～49・019-13・020-41ほか），剣形2点（014-17・019-12），勾玉形2点（014-16・018-50），未製品1点（020-42）がある。灰色から緑みの灰色で片理をもつ石質が多く、ほかに滑らかで密な石質，褐色味帯びるロウ石質，光沢をもつ結晶片岩質，蛇紋岩質などがみられる。房総産蛇紋岩の特徴とされる磁鉄鉱が入る例はない。片面穿孔により反対面に剥がれを生じているものが多い。017-14と018-44は外周の研磨面位置が一致し、唯一、一緒に整形された可能性があるが、穿孔位置は一致しない。020-42は板状剥片に擦切りと穿孔の痕跡を有する未製品で、穿孔時に破損したとみられる。玉などの素材を採取した石核の可能性がある018-51も存在することから、石製品の一部が集落内で製作された可能性がある。ただし、少數であり、石材が多様であるので、集中的な生産は想定できない。